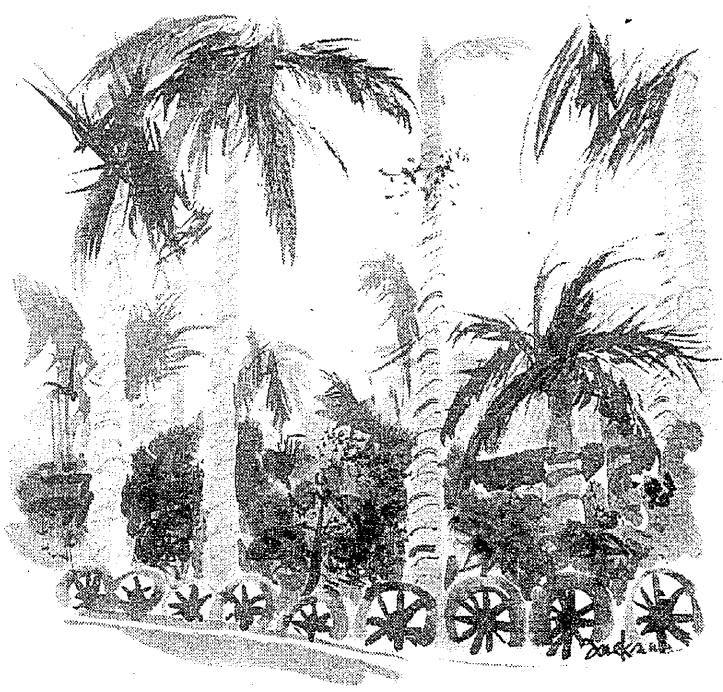
沖縄の旅から



植物園

（ブーゲンビレア）

沖縄市の北郊にある東南植物楽園の中の植物園。四百五十種もあるというヤシ類が主体だが、熱帯庭園、ヤシ園、熱帯果樹園、花木園などに分かれ、トックリヤシや白い樹皮のブーゲンビレアの並木道が通じる。見上げると、ヤシの葉が天をおおい、まさに密林ムードがいっぱい。

画　17分会　姉川良男

ヒューマニズム 平和、友好を大切に

俳優　栗原小巻さん

「過去のものではなくて、いまの問題として受けとめた。感動しました」という、お手紙や励ましをたくさんいただきました。舞台を観てくれた方たちの、見る前のイメージは暗い、むつかしいということでしたので、表現をする人間としてとても嬉しいことでした。

七月中旬に、モスクワ映画祭に行ってきました。テーマに〝ヒューマニズムと平和、友好〟の三つが掲げられていました。俳優として生きていく上で、大切にしていきたいテーマだと思いました。

私は戦争を知らない世代ですが、育ってくる過程で戦争の後遺症は知っています。中国残留孤児の問題とも、関係ない世代ではありません。これらを伝えていく世代だと思います。

それだけに、うかうかしないで、見過ごすことなく、見つめていきたいと思っています。

これまでも心がけてきたことですが、これからも作品を選び出し、作品を通して自分自身を表現し、語ることをしていくつもりです。あまり自分の口から言うことではありませんが、押しつけがましくなく、演じていきたいと思っています。

俳優座の「エセルとジュリアス」は、原爆スパイで死刑にされた夫婦の感動的な生き方を描いた舞台。妻エセルを熱演、米国で三十五年前に起きた事件を現代によみがえらせました。

1982年、第2作目の今井正監督作品「ひめゆりの塔」で女教師役を熱演した栗原小巻さん。

核時代を作った科学者の憂慮（上）

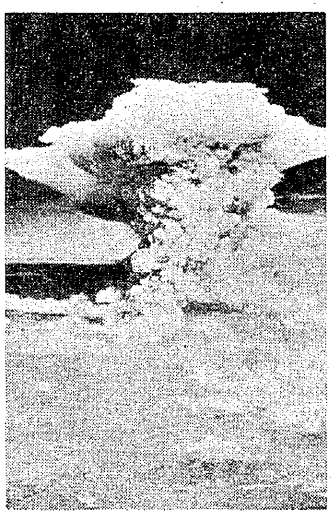
東大助手　安斎育郎

原爆不使用請願書も

「ドイツ人が原爆の製造に成功しないとわかっていたら、私は指一本動かしはしなかった」

第二次大戦後の一九四七年、「危機を考える原子科学者委員会」議長であったアインシュタインは、ある手紙の中でこう述べた。

それは、不幸な歴史の巡り合わせであった。科学者たちが、核エネルギーの秘密のベールを取り払いつつあった一九三〇年代の末、ヒトラーに率いられたナチ党はますます狂暴化し、ヨーロッパはさながら虐殺の舞台と化しつつあった。



ヒロシマに落とされた原爆第1号によるキノコ雲。

結果的にはヒトラーを恐れるあまり、われわれが原爆を作ることによって、ドイツに対する抑止力になると思った」。

―マンハッタン計画の反省―
ヒトラーを恐れるあまり…

タン計画――それはハンガリー生まれの亡命科学者レオ・シラードの説得を受けたアインシュタインが、一九三九年にルーズベルト米大統領にあてた手紙がひとつの契機となって発足した巨大な秘密プロジェクトである。この計画には多くの科学者が動員されたが、原爆の完成が近づくにつれて、少なからぬ科学者は憂慮の念をつのらせていった。

ノーベル物理学賞受賞者ニールス・ボーアは、「たとえ一時的な利益がどんなに大きくとも、それ以上に人類の安全が不断に脅かされることになる」と述べ、シラードを含む約七十人の科学者たちはトルーマン大統領への原爆不使用請願書の中で、「破壊を目的として、この新しい解放された自然の力を利用するという先例をつくる国家は、想像を絶する規模の荒廃の時代への扉を開いた責任を負わねばならなくなる」と警告した。

ドイツでなく日本に…

しかし、フランク・バーナビー博士も言うように、現実の政治家はボーアの期待とは裏腹に、何よりも〝一時的な利益〟を重視し、原爆を使用した。ドイツに原爆製造能力のないことを悟った時点で、マンハッタン計画から手を引いたロートブラットは、「われわれの目的は原爆が使われないようにすることであった。今から考えるとこの抑止力の考え方は間違いだったし、結局原爆はドイツに対してではなく、原爆を持っていない日本に対して使われてしまった」と苦衷を語っている。核抑止論の呪縛は、超克されねばならない。

非人道の軍靴の響きは、世界を震撼させ、科学者たちにも深刻な危機感を抱かせていた。

「当時われわれ科学者は、大きなジレンマに陥っていた。そして

ジョセフ・ロートブラット博士は、当時を回顧してこう語っている。彼は、ポーランド出身の亡命科学者で、イギリスの科学者チームの一員として原爆製造計画――マンハッタン・プロジェクト――にも参加した経験をもつ。マンハッ

7つのまちがい

〈問題〉　下の絵は上と七カ所のまちがいがあります。どこでしょう。（印刷のよごれやかすれはまちがいにはいりません）こたえは三面に。　出題　西山　進

暑中お見舞い申し上げます

夏をいかがお過ごしでしょうか。

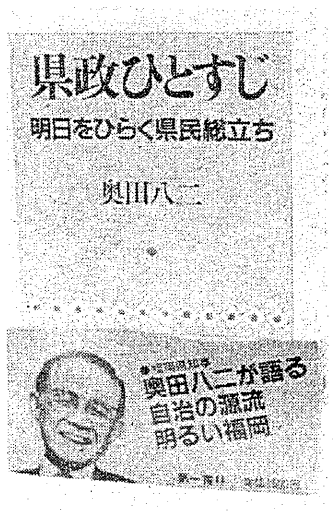
みなさんの熱い支援のなかで、奥田県政も三回目の夏を迎えています。五十八年春、清新なスタートを切って以来、県民本位の開かれた県政をめざし、着実に歩いてまいりました。その間、奥田知事は、県内をくまなく回り、県民との対話を各所で行って県民が望む、あるべき福岡県政を遂行しています。

小さな一歩が旅の始まりであるように、小さな波が、大海で大きな波へ集まっていくように、奥田県政は一人ひとりの県民の声を、県政の第一歩としています。

清潔な県民本位の県政をつくる会

新刊紹介

奥田県政の真実を語る
「県政ひとすじ」
―明日をひらく県民総立ち―



三年目を迎えた奥田八二知事が、県政二年間の政治姿勢、公約実現への努力などを「県政ひとすじ―明日をひらく県民総立ち」（三一八頁、B六判）にまとめ、広く県民に〝本音〟を語りかけています。

第一部は「私のスタンス」で「奥田県政」の二年間―そのキー・ワード（一章）、二十一世紀の郷土、福岡県を展望して（二章）から成り、各部以下のとおり。

第二部「県民とともに」。県民とともに―県民と語る（一章）職員に語る―庁内活性化をねがって（二章）、明るい郷土へ（三章）。

第三部「『総立ち』が始まった」。二十一世紀に向けての地域づくり試論（一章）、「総立ち」のパイオニア（二章）。

具島兼三郎氏（九州大学名誉教授）の発刊によせての文には「本書は、奥田君が知事として過去二年間県政の矢面に立ち、大学とはちがった政治の世界のなかで、県民のためによかれと希いつつ、考え抜き、実践してきた思索と行動の記録である」とのべ、多くの人びとが手にすることを希望しています。

同書は第一書林刊、千五百円組合を通じますと千三百円。